

# 対人援助におけるファシリテーショングラフィックの 機能

## -実践事例を通して-

石橋 智晴

京都教育大学連合教職大学院 教職実践研究科 教職実践専攻 授業力高度化コース

### 1. はじめに

筆者は、2012年より話し合いの現場でファシリテーショングラフィックを用いた対人援助活動を開始した。話し合いの現場では、常にコミュニケーションを通して共通の認識を作る作業が行なわれている。しかし、その作業も共通の認識を作っているようで、実際には、お互いに伝えたいことがかみ合わず対立につながる現状を生んでいることも多い。そのような現場に携わる中でファシリテーショングラフィックを用いることは、話し合いに参加している人たちの共通認識作りをサポートするという対人援助的な側面があると考えた。本稿では、筆者の実践事例を通して、話し合いの場面で活用されるファシリテーショングラフィックの機能を明らかにすることを目的とする。

### 2. ファシリテーショングラフィックとは何か

ファシリテーショングラフィックを堀、加藤（2006）は「議論の内容を、ホワイトボードや模造紙などに文字や図形を使って分かりやすく表現し、「議論を描く」こと」と定義している。デビット・シベット（2013）は、ファシリテーショングラフィックは1970年代にアメリカ西海岸を中心に住民参加のまちづくりや非営利組織の話し合いの中で用いられ、The grove consultants international 社のデビット・シベット、ダニエル・アイソファーノらによって体系化されたと述べている。尚ここでは、ファシリテーショングラフィックという名称は用いられず、ビジュアルミーティングやグラフィックファシリテーションという名称が用いられている。1990年代後半には、日本においても一般社団法人世田谷トラストまちづくりが1998年に発行した「参加のデザイン工具箱」やNPO法人まちづくり学校が1999年に発行した「まちだす」にファシリテーショングラフィックという言葉が登場することから90年代には日本にもファシリテーショングラフィックと呼ばれるものが存在していたことが示唆される。しかしどのような経緯で、日本でファシリテーショングラフィックという名称が用いられるようになったかは定かではない。

また、ファシリテーショングラフィックと類似する手法として近年では、グラフィックレコーディング、スクライビング、リアルタイムドキュメンテーションなどの手法が用いられることもある。特に、堀が定義したファシリテーショングラフィックの定義にグラフィックレコーディングが包括されているため、ファシリテーショングラフィックと混同されている。そのため、日本においてはファシリテーショングラフィックと言う名称はグラフィックレコーディング、ファシリテーショングラフィック、グラフィックファシリテーションの3つの類型を合わせた広義の名称として使われることが多い。混同を避けるために、本稿では堀と加藤のファシリテーショングラフィックの定義に①話し合い中に必ず参加者全員が見える所で記録するという点と②ファシリテ

ターがグラフィックを兼任するという2点を加えてファシリテーショングラフィックと定義し、その機能について論考する。尚、グラフィックファシリテーションという手法は、創造性を誘発するために参加者の中に浮かんできたイメージやアイデアを即時に絵や図に表すという側面が強い。そして、それらをファシリテーターだけでなく、参加者がグラフィックを用いて記録する話し合いの形態をビジュアルミーティングと呼ぶことが多い。

混同を避けるために、広義のファシリテーショングラフィックの3類型に関しては、筆者の経験を元に図1にまとめた。

図1 広義のファシリテーショングラフィックの3類型

|      | グラフィックレコーディング                                     |  | ファシリテーショングラフィック   | グラフィックファシリテーション   |
|------|---|--|---|---|
| 使用場面 | 講演会   | 対話型イベント  | 一般的な会議  |   |
| 描き手  | グラフィッカーによる話の記録                                    | グラフィッカーによる場の記録   | グラフィッカーによる議論の整理と場の記録  | ファシリテーターによる議論の整理と場の記録   |
| 進行   | 講演者、または司会者が進める                                    | ゲストと参加者が対話をしながら進める   | ファシリテーターが務める  | ファシリテーターが進行とグラフィックを同時に行う  |
| 目的   | ふりかえり   | ふりかえり  | 議論の整理<br>ふりかえり  | 議論の整理<br>ふりかえり  |
| 特徴   | 絵や図を用いたりしながら話の内容を可視化する<br><br>一枚の絵にすることを意識することが多い | 絵や図を用いたりしながらその場の雰囲気・起こったこと・話の内容を可視化する<br><br>一枚の絵にすることを意識することが多い | 話し合いの内容を集類・分類したり、図解したりしながら話の流れがわかるように書く<br><br>論点の整理が目的のためヴィジュアル的な綺麗さはあまり求めない | 話し合いの内容を集類・分類したり、図解したりしながら話の流れがわかるように書く<br><br>論点の整理が目的のためヴィジュアル的な綺麗さはあまり求めない |

出典：筆者作成

### 3. 実践事例を元にしたファシリテーショングラフィックの機能

#### 3.1. 認識・知識の差を埋める働き

100人規模で若者が語り合うイベントである京都わかもん会議の企画ミーティングから分かったことがある。2016年1月の企画のコンセプトを何度も練り直すミーティングで、ファシリテーターである筆者が参加者の話の中から重要だと思う情報を選択して記録していると、それらを指差しながら発言者に質問する参加者が現れた。また、時には立ち上がり記録した情報を指し示す者もいた。記録されたものを足がかりに、同じ言葉を使用しても生じる認識のズレを解消し、共通の理解を深めていくことができていた。ファシリテーショングラフィックは即時的に絵、図、文字を使って、参加者の理解が促されるような形で書き表していく。そのため議事録のように全てを書き表すことは難しく、話されたことの中から重要だと思う情報をファシリテーターが選択して記録する必要がある。それらの情報は、少なからずファシリテーターの認知バイアスがかかることから逃れられないが、今回の事例のように、1つの基準として記録されることでファシ

リテーターと参加者、または参加者間の認識の違いの発見につながる事がわかった。それらの違いを明確にすることで、共通する部分がよりはっきりと現れることになった。

また、会議に途中から参加する人に対しても知識の格差を埋める働きがある。上記の企画ミーティングでは話し合いの途中から参加する人も多かった。その都度、ファシリテーターが1から話の流れを説明しては膨大な時間が掛かり、参加している人の思考を分断することにもつながりかねない。そこで、途中から参加した人と席の近い人が記録された情報を元に合流者に説明をしていた。そうすることで、時間差で生まれた知識の格差を埋めることができ、合流者が話し合いに参加する時には最初から参加していた人と足並みをそろえて参加することができる。

### 3.2. ふりかえりを促す働き

描き上がったものはその場のプロセスとコンテンツがヴィジュアル化することによって掲載されているため文字だけの議事録と比較しても「もう一度見てみよう」という意志を参加者に喚起させやすい。現場では、参加者が描いたものを写真に撮って持ち帰ることが多い。そこで、どのくらいの人が写真を撮りデータとして手元に残しているのか、また、それらはふりかえりに使用されているのか、検証するためにアンケートを実施した。対象は、ファシリテーショングラフィックが行なわれている話し合いの現場に参加したことがある67名とした。尚、筆者以外のファシリテーショングラフィックでも良いこととした。結果は図2、図3に記した。

図2 ファシリテーショングラフィックをデータとしてふりかえりに使用した頻度

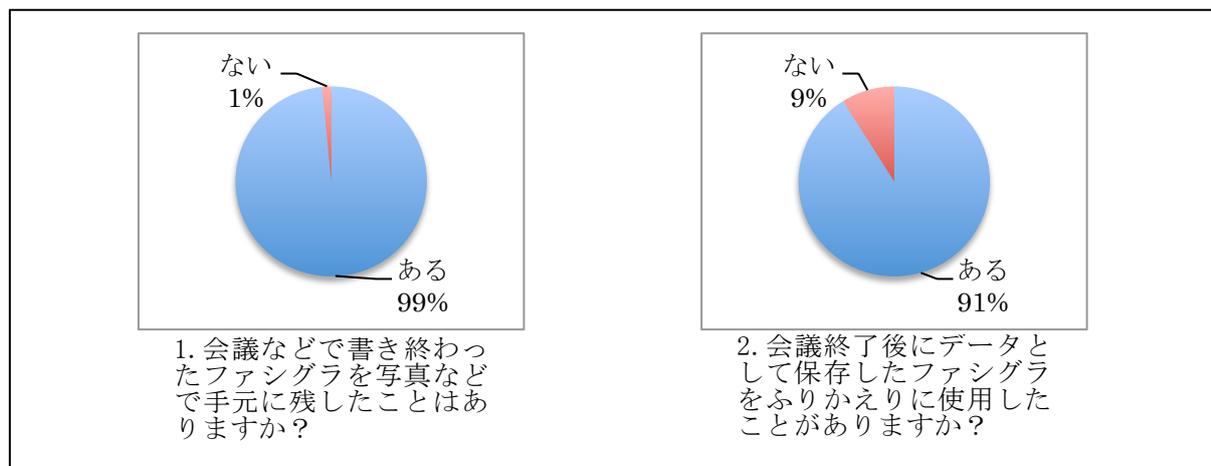


図3 ふりかえりにおけるデータ化したファシリテーショングラフィックの使用目的

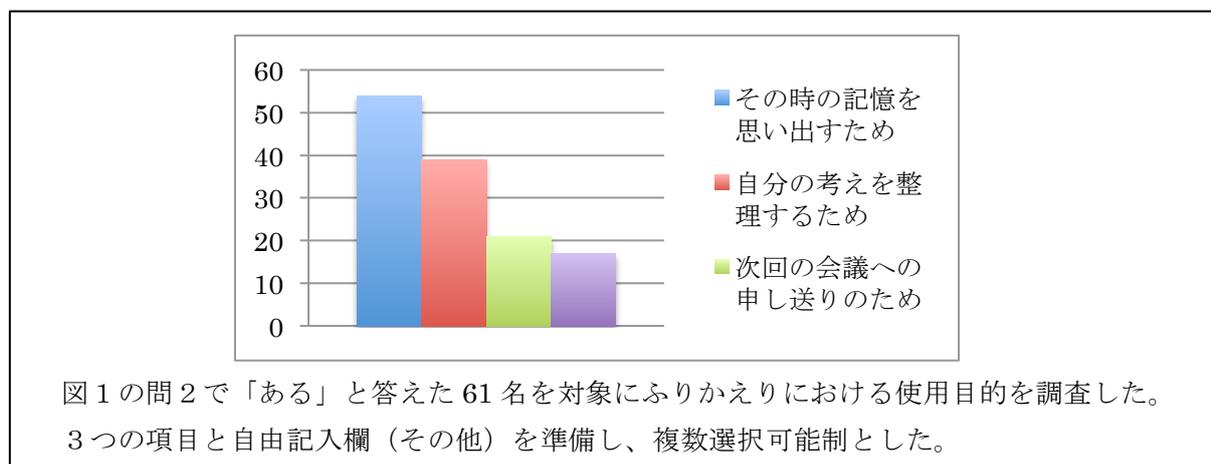


図1の問2で「ある」と答えた61名を対象にふりかえりにおける使用目的を調査した。3つの項目と自由記入欄（その他）を準備し、複数選択可能制とした。

図2からわかるように、ファシリテーショングラフィックが行われると、90%以上の人がファシリテーショングラフィックをデータとして手元に残しふりかえりに使用していることがわかった。図3を見ると、その時の記憶を思い出すという目的が最も多く54名であったことがわかる。約88%の人がその時の記憶を思い出すためにファシリテーショングラフィックを使用していることがわかった。また、その他の回答の中には、調査した使用目的以外にさらなるイメージを広げるためや、議事録や本の作成に使用するためや、関係者との調整資料とするため、未出席者への説明資料とするため、その時に感じ取れなかった内容や気づきを得るため、事業報告書作成のため、自分のファシリテーショングラフィックの参考にするため、自分のノートやメモと比較するためなどが挙げられた。

これらの調査から、ファシリテーショングラフィックをデータ化して手元に残しておくことは、その時の記憶やイメージを思い出すふりかえりだけでなく、参加者がその時に考えたり・感じたりすることができなかったことを自己の記憶に新たに付け加える効果があることがわかった。

また、申し送りに関しては、記憶を共有化し、次の会議のためのそれぞれの行動を促すことにつながる。京都市と大学が連携して行なっている住民参加のまちづくりプロジェクトの1つである茶論案庵プロジェクトでは、筆者がファシリテーショングラフィックを行い、描きあげたものをデータ化して次のミーティングの冒頭でA3用紙に印刷をして参加者に配布した。これまでの話し合いの流れを共有するという意味では、これまでの参加者のふりかえりを促し、また新規参加者に対する情報の共有にも繋がった。

図4は参加者に前回のファシリテーショングラフィックをA3用紙に印刷したものを配布し説明している様子である。



図4 配布時の様子

#### 4. 考察

実践事例と、アンケート調査からファシリテーショングラフィックには、参加者の認識・知識の差を埋める機能とふりかえりを促す機能があることがわかった。また、ふりかえり際には話し合いの中で認識・理解できなかった部分を事後に補足するという副次的な効果があることがわかった。さらにアンケート調査の自由記述の欄から、上記の2点以外にも別の資料を作成するための参考資料として機能していることも発見することができた。

#### 参考文献・引用文献

- ・加藤彰(2006)『ファシリテーション・グラフィック-議論を「見える化」する技法-』日本経済新聞出版社
- ・デビット・シベット(2013)『予想外のアイデアと成果を生む「チーム会議」術 ビジュアル・ミーティング』(堀公俊・平山猛・加留部貴行・高見真智子 訳)朝日新聞出版